

三浦半島に飛来したオオチドリの観察

柴田敏隆・川島清

Observation of the Eastern Dotterel, *Eupoda asiatica verdus*,
on the Miura Peninsula, after a 42 years' absence.

Toshi. SHIBATA* and Kiyoshi KAWASHIMA**

(with 1 table, 2 text-figures and 1 plate)

1962年4月8日より14日に至る7日間、三浦市宮田の台地で、日本内地では1920年に記録されて以来42年ぶりといわれるオオチドリ *Eupoda asiatica verdus* (GOULD), Eastern Dotterel が1羽発見、観察されたことは、既に、新聞、NHK TV News等で報道され、筆者等も日本野鳥の会々誌「野鳥」その他に短かい報告を寄せておいたが、ここに当時の観察記録を整理してやや詳しく記述することにする。

従来 of 記録

オオチドリは元来アジア大陸のモンゴール、中国の東北地方(満州)、チベットなどの地方で蕃殖し、冬季はフィリッピン、マラヤ、インドネシア、オーストラリアなどにも渡来し、中国大陸の四川、河北、江蘇、広東の各省にも分布している。(近似亜種 *Eupoda asiatica asiatica* はヴォルガの下流から中央アジア一帯に分布し、冬季はアフリカに渡って越冬し、ブルガリア、ヘリゴランド、イタリー、イギリスなどで獲られた記録もある。)

日本附近では旅鳥または迷鳥として、極めて稀に、韓国、濟州島、先島諸島などに飛来するだけで、山階鳥類研究所には前記地点の他、元満州興安北省の拉穆古爾廟(Lamagulul)で採集されたものなど7点の他には、日本産の標本は一点もない。日本鳥類目録1958年版によると Hartert は1920年に日本で、この鳥を記録したと報告しているが、ただ Japan とだけ書いて、日本のどこで記録したのか明らかでない。また、小林桂助氏の書信によれば、神奈川県産(at Sagami Honshu)とだけあり、他は不明)の標本が1点、New YorkのAmerican Museum of Natural Historyに所蔵されているが、これは Owston Collectionの一つで、採集年月は不明、この標本と Hartert が Vögel に報告したものが同一標本であるかどうかはわからない。Owstonは、自身で採集することなく、採集人を備っていたので、これも恐らく横浜の市場で購入したものであろう、とされている。

採集年月不明の Owston の標本を別として、Hartert が1920年に日本で記録したという報告が正しいものとすれば、今回の記録は丁度42年ぶりの日本内地での記録になるわけである。

しかし、小林桂助氏の書信によれば、1961年10月1日、大阪湾の南港埋立地にて本種の冬羽と思われる1羽を、日本野鳥の会大阪支部の松根元男氏が観察し、写真に撮ったが、あまり小さく写っているので確認とはなり得なかったとのことで、或は、案外、観察者の目の届かない近くに時々来ているのかも知れない。

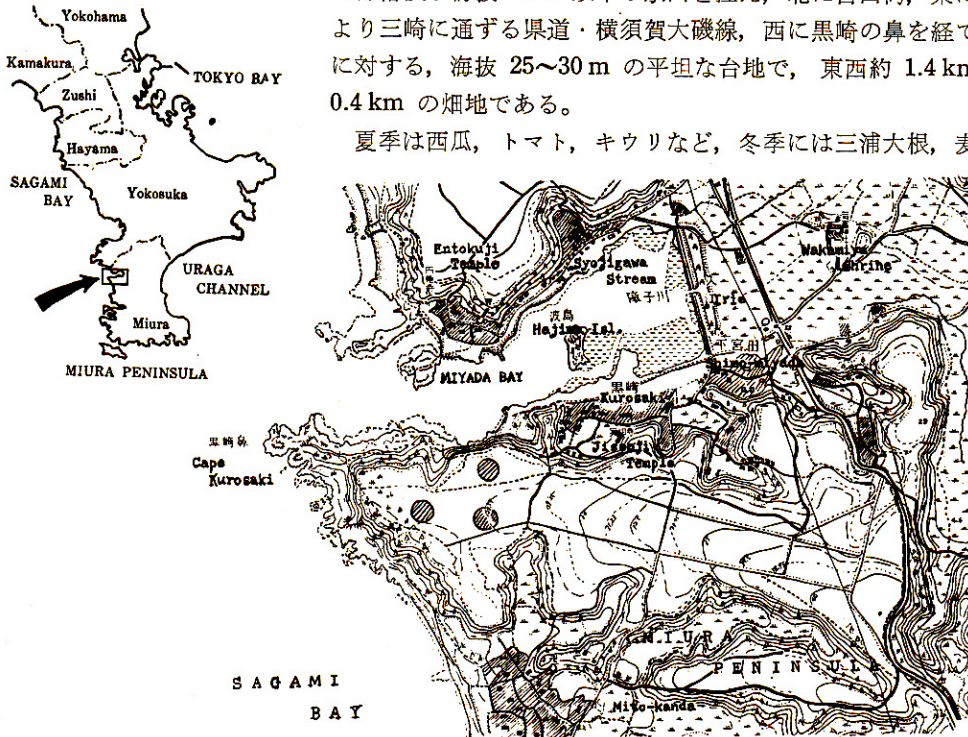
* Yokosuka City Museum.

**43 Yawata-Kurihama, Yokosuka.

観察地の環境

オオチドリが渡来した宮田の台地は、三浦半島の南西、三浦市の北西部に当り、南側に水戸神田の部落及び海拔 10 m 以下の水田を控え、北に宮田湾、東に横須賀より三崎に通ずる県道・横須賀大磯線、西に黒崎の鼻を経て相模湾に対する、海拔 25~30 m の平坦な台地で、東西約 1.4 km、南北 0.4 km の畑地である。

夏季は西瓜、トマト、キュウリなど、冬季には三浦大根、麦、ネギ



Text-figure 1. オオチドリの渡来した宮田周辺図
Map of the vicinity of Miyada

などが栽培されている。台地の周辺及び海寄りの斜面は一面のネザサに被われ、その他の斜面は、黒松、トベラ、モチ、シイ、タブ、カイガンマサキなどの木本が良く繁茂している。

この附近は冬季温暖で、年平均気温 15.5°C、4月の平均気温 13.5°C、年平均降水量 1600 mm、風は夏季は南、冬季は北東風が卓越し、4月の平均風向分布は略々、南東を示し、気候区分の上からは、湘南房総南東部地区に包括される。

観察の経過

1962年4月8日、筆者の一人川島は宮田の先端、黒崎の鼻へクロサギ、ウミアイサなどの観察に行き、その帰途、午前8時頃、宮田の台地、5 cm ほど芽を出した馬鈴薯畑の中に1羽のみなれないチドリがいるのを発見した。6倍の双眼鏡で観察した後、スケッチをして、特徴を簡単に記入して帰り、図鑑と照合した処、どうもオオチドリらしい。そこで、夕方筆者の一人柴田を訪ねて、丁度同席した日本野鳥の会横浜支部幹事伊達陸氏と三人で検討した結果、オオチドリに間違いなさそうであるが、翌日、今一度、現地を確認することにした。

4月9日、川島は午前6時頃、単独で現地へのぞみ、昨日と同じ場所に、同じ鳥を発見し、40 m ほどの距離で観察した結果、確実にオオチドリであることを認め、直ちに帰って柴田を同行し、午前9時頃、再度現地におもむいた。まず双眼鏡での観察により9枚のスケッチをとり、次いでカラーフィルムを装填した8耗撮影機に75 mm の望遠レンズをつけたもので約 15 m の距離まで接近して撮影をした。午前11時頃、日本野鳥の会幹事の金田平氏がみえて、アサヒペンタックスカメラ

ラに 300 mm 望遠レンズをつけたもので、10~18 m の距離で撮影し、これらによってどうやら第三者に対する確証を掴み得たものと考えられたので、後は遠くより双眼鏡で観察を続けた。午後 2 時、帰って直ちに東京の山階鳥類研究所へ連絡する。

4 月 10 日、大雨が降った。

4 月 11 日、山階鳥類研究所の高野伸二氏より連絡があり、現地でも、500 mm 望遠レンズで撮影されたとのこと、この日は各新聞社、NHK の記者が取材した。

4 月 12 日、NHK TV News が取材にきて、アリフレックス 16 mm 撮影機に 300 mm 望遠レンズを使用、約 300 feet 撮影をした。これは、NHKTV 東京 Local News で放送された。この日、日本野鳥の会横浜支部幹事の寺島浩一氏も、500 mm 望遠レンズを装着した 35 mm カメラにて撮影をした。

4 月 13 日、川島は午前 5 時より 6 時 10 分まで、動作や行動を観察、足跡の計測を行った。

4 月 14 日、午後 5 時すぎ、川島は観察を続ける、先行した 2 名の野鳥の会々員より、いつも好んでいつく黒崎の鼻寄りの台地にいるとの報告を受ける。オオチドリは休みなく活発に採餌を続ける。6 時 12 分、畑の中程で採餌を止め、北東風に向かって立止る。ピギギ、ピギギとなき、羽繕いをし、5~6 回嘴で胸や肩のあたりをなでつける。6 時 14 分、片脚で佇立、首を締め丸くなる。時に首をもたげ警戒するが、やがて首を背に入れて眠につく、6 時 20 分、近くの農道を自転車で走ってきた人に気付いて、頭をもたげ、あたりを見廻す。そわそわして着がなくなる。6 時 25 分羽繕いははじめ、先のとよりゆっくりと、ずっと丁寧に行う。6 時 25 分、ピーチチ、ピーチチとなく、6 時 37 分、ピッピッピッピッと 2~3 秒間隔で 5~6 声なく。丁度メモをとっているとき、性急なピッピッという声移動していくのが耳に入る。みると小松林の上を北に向って飛ぶシルエットを認め、あわてて双眼鏡で追う、小松林を外れてからやや上昇していった。そして西北方の空に僅かに残る一段と明るい雲の中に M 型のシルエットとなって行き、やがて点となって視界より消えた。この日、日没は午後 6 時 13 分であった。

4 月 15 日、川島は念のため再び現地を訪れ、News をききつけて集まったおおぜいの野鳥の会々員達と探したがみられなかった。

この一週間、天候は不順で 10 日と 13 日に夫々 1004 mb の低気圧の通過があり、10、12、13 日と雨が降った。気温は略々平年並であったが 9 日は異常に暖かく（横浜における最高 20.2°C で平年より 4.1°C 高く、最低 14.5°C で平年より 7.2°C 高かった）12、13、14 日は寒かった。（13 日の横浜に於ける最高気温は 11.9°C で平年より 5.0°C 低かったが同日の最低気温は平年より 2.9°C 高い 10.3°C であった）。風は 8~9 日は南乃至南西の風が強風力 5 に達する時もあり、11~13 日は北乃至北東に偏し、風力は 2 乃至 3 であった。

観察の結果

大きさ、本種は清棲氏の計測によると翼長、152~183 mm、体重 77~88 gr ほどで、日本産チドリ科鳥類の中では中型に属し、野外での見かけの大きさもツグミ *Trudus naumanni eunomus* TEMMINCK よりやや大きく、キジバト *Streptopelia orientalis orientalis* (LATHAM) よりずっと小さい。

日本産のチドリ類の中ではメダイチドリ *Charadrius mongolus stegmanni* STRESEMANN よりずっと大きく、イカルチドリ *Charadrius placidus japonicus* MISHIMA の大型の個体より少し大きく、ダイゼン *Squatarola squatarola* (LINNÉ) より小さく、ほぼムナグロ *Charadrius dominicus fulvus* GMELIN 大（ムナグロの小型の個体より大きく、大型の個体より僅かに小さい）

体型、小型チドリ類よりも胴の割に頭が小さく、脚が長いので、警戒時に首や脚をのぼしたとき

日本で記録された千鳥科鳥類の大きさ比較表
 Table 1. External Measurements of Charadriidae found in Japan (in mm)

	Culmen	Wing	Tail	Tarsus	Weight (gr.)
Eastern Oystercatcher ミヤコドリ <i>Haematopus ostralegus osculans</i> SWINHOE	80 - 110	230 - 280	100 - 115	48 - 58	487 - 642
Gray-headed Lapwing ケリ <i>Microscops cinereus</i> (BLYTH)	34 - 37	225 - 255	100 - 118	70 - 79	236 - 413
Lapwing タゲリ <i>Vanellus vanellus</i> (LINNÉ)	22 - 28	203 - 236	91 - 119	41 - 50	179 - 275
Grey Plover ダイゼン. <i>Squatarola squatarola</i> (LINNÉ)	26 - 35	175 - 213	69 - 83	43 - 51	187 - 303
Golden Plover ムナグロ <i>Charadrius dominicus fulvus</i> GMELIN	20 - 27	155 - 190	53 - 66	38 - 48	86 - 123
Eastern Dotterel オオチドリ <i>Eupoda asiatica veredus</i> (GOULD)	22 - 25	152 - 183	58 - 62	44 - 50	77 - 88
Dotterel コバンチドリ <i>Charadrius morinellus</i> LINN	14 - 20	143 - 161	62 - 76	33 - 39	—
Large Sand Plover オオメダイチドリ <i>Charadrius leschenaultii leschenaultii</i> LESSON	22 - 27	132 - 149	48 - 62	34 - 39	75 - 150
Long-billed Ringed Plover イカルチドリ <i>Charadrius placidus japonicus</i> MISHIMA	19 - 23	130 - 152	68 - 78	30 - 34	41 - 95
Mongolian Plover メダイチドリ <i>Charadrius mongolus stegmanni</i> STRESEMANN	15 - 19	124 - 142	47 - 58	27 - 33	45 - 92
Ringed Plover ハジロコチドリ <i>Charadrius hiaticula tundrae</i> (LOWE)	12 - 15	117 - 132	53 - 61	23 - 27	—
Eastern Kentish Plover シロチドリ <i>Charadrius alexandrinus nipponensis</i> DEIGMAN	16 - 19	102 - 119	44 - 54	25 - 33	36 - 67
Kentish Plover ハジボロ シロチドリ <i>Charadrius alexandrinus alexandrinus</i> LINNÉ	14 - 16	106 - 119	47 - 50	27 - 31	45 - 48
Little Ringed Plover コチドリ <i>Charadrius dubius curonicus</i> GMELIN	11.8 - 14.5	106 - 121	50 - 63	22 - 26	31 - 51

計測値は清棲幸保、小林桂助両氏に依った、配列は上から大きさの順による。

Arranged in order from large to small.

Measurements by K. Kobayashi and Y. Kiyosu.

は、ケリ *Microsarcops cinereus* (BLYTH) のような体型になるが、採餌の際などに首を縮めてチョコチョコ走りまわる様子は小型チドリ類に良くにている。総じて小型チドリ型に属する体形である。

色彩*、野外で観察した所見では、嘴と目は黒く、額、肩斑及び腮部は白っぽい淡香色 *Vanilla*、胸部は喉の近くは飴色 *Rose Amber*、腹部に近づくに従ってだんだん濃くなり棒色 *Rust* に変じ、その下端は黒色の帯でふちどられていた。腹面、脇、下尾筒は純白、頭頂より後頸、背にかけては淡いけんぼう色 *Olive Brown*、雨覆も同色で同じくらいの濃さ、後頸部と肩羽、三列風切にかけてはややうすい同色であった。次列風切は桑色白色 *Malmaison*、初列風切の外側はこい煤竹色 *Sepia* で一見黒くみえ、脚はくちなし色 *Corn or Maize* であった。以上は地上に立っているときの所見であるが、飛翔時は翼角の前下面が非常に淡色で白っぽく見えた。初列風切も濃くみえたが特に黒っぽく目立つほどではない。後斜上方から見ると、次列風切の後端及び尾部両側外弁、及び先端部の白色部分が良く目立った。今回観察の個体は色彩からみて、ほぼ完全に近い夏羽の、成熟した雄と思われた。尚、喉の部分に一カ所、大きな脱毛の痕があるのが目立った。

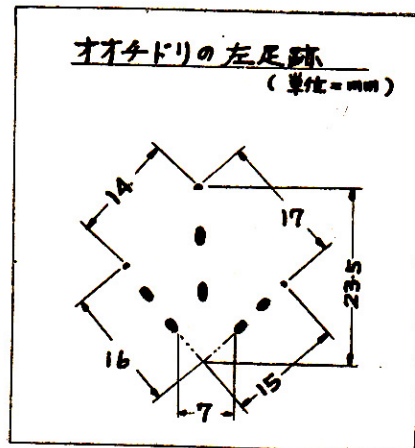
動作、一般的にいて小型チドリに似て敏速果敢であるが、大柄なせいから多少鷹揚な動作にみえた。左右の脚を交互に動かしては素速やく歩み、ツツと 2~3 歩乃至 5~6 歩歩いては啄食しながら、一例では、約 10 m の距離を 30 秒で歩き、その間に 12 回の啄食を行った。裸地か余り作物の生えていない畑のうねからうねへ移りながら、しきりに地上から赤色の小虫を啄食していたが、それが何という動物であるかは確認に至らなかった。(清棲氏によれば本種はスナゴミムシダマシなどを啄食するという。) 時に立止った折に尾を下方へピクンと下げる動作(イソヒヨドリのやる動作に似た)を行うこともある。休憩の際は首をすくめ、両脚で立つか、片脚で佇立し、他のチドリ類と同様である。また時に地上に蟠居して休息するのも認めた。休眠時は片脚で佇立し、首を背面の羽毛に埋めて行う。今回の観察では土質の関係から、足の運び方がほとんどわからなかったが、4月13日に左足のらしい足跡を一つだけ記録することが出来た。足の運びのピッチは判りにくかったがおよそ 9 cm あった。

警戒の時は、他の行動を停止し、首を上方に伸ばし、脚も伸ばして全体に背のびをした恰好になり、しきりにあたりをうかがう。このときの姿態は小型チドリよりもケリに類似したものになる。そしてしきりにしゃくりあげるような動作を繰返し、一例では 20 秒間に 8 回のシャクリ様の動作を見た。

飛翔は力強く迅速で、追われて飛たった直後は多少不規則な電光形の飛翔をする。飛翔中の姿勢は翼巾が狭く、長く、特に次列風切の部分が他のチドリ類に比べて長いのが目立ち、一見アマツバメを彷彿させる。飛翔中を前方または後方から見ると、M型にみえるのが特徴である。

鳴声、採餌を止めて立止ったときなどに、ピギギ、あるいはピーチチ、ピーチチとなくのを認めた。警戒の折にはピッ、ピッ、ピッ、ピッあるいはピルッというような力強い声で 2~3 秒間隔でないた。飛立つ瞬間ピーと鋭くなき、飛翔中もピッピッピッとなき続けることもあった。

行動、今回の観察では宮田の台地の西端近くの作付のされていない三カ所の裸地畑に好んでいつき、(Text-fig. 1 ●印参照) 特に一番海寄りの裸地にいつくことが多かったが、麦やネギの良く生



Text figure 2.
Left track of Eastern Dotterel

* 色名は日本色彩研究所編 色名大辞典 1954 によった。

育した畑には一回も入らなかった。芽をだしたばかりの馬鈴薯畑には追われるとしぶしぶ入るといった工合であり、飛立っても少時旋回飛翔の後、遠くも200m以内の畑地に降り立って決して他へ移ろうとしなかった。観察当時、この台地には本種の他に、ツグミ、ホホシロ、ハシブトガラス、ウズラ、セッカ、タヒバリ、スズメ、コカワラヒワなど8種の鳥がいたが、これらの鳥の存在を特に警戒するような様子は見られなかった、一例として、1羽のツグミが採餌中の本種の後方2mほどの至近を歩いて通ったことがあったが何等の反応をも示さなかった。しかし人間の接近に対しては比較的敏感に反応し、特に発見当時は10mくらいまでの接近が容易であったものが、次第にシャイになり、渡去当時は30mくらいの遠くからもいちやく飛立つようになった。連日入かわり立かわり訪れる報道関係者や野鳥観察家に執拗に追いまわされたからであろう。

要 約

1962年4月8日より14日に至る7日間、三浦半島の西南部、三浦市宮田の台地に1羽のオオチドリ *Eupoda asiatica verdus* (GOULD) が飛来し、滞在した。

このオオチドリは、夏羽の成熟した雄と考えられる。

体型は他の小形チドリ類に類似し、警戒時首や脚を高くのばしたときにはケリに似た。

色彩では腹面の白色、胸部の樺色の部分が特に目立ち、背面は淡いけんぼう色 Olive Brown であった。飛翔時は、翼角の前下面が淡く、初列風切の色が濃く目立ったほか、次列風切の後端及び尾の白色部分が良く目立った。

動作は一般に小型チドリ類に似て敏速果敢であるが、大柄な故か多少鷹揚に見えた。裸地を好んで啄食し、作物の生いじげた畑の中には入らなかった。休憩時は首を縮め、片脚で佇立し、或は地上に蟠居した。警戒の時には20秒間に8回のジャクリ様の動作を見た。

飛翔は力強く敏速で、追われて飛立った直後は不規則な電光形の飛翔をした。飛翔中は翼巾が狭く長く、特に次列風切の部分の長いのが目立った。前方及び後方より見るときは逆W型のシルエットに見える。

鳴声はピギギあるいはピーチチと鳴き、警戒の際はピッピッあるいはピルッと力強く鳴く、飛翔時、飛翔中もなくことがあった。

今回渡来の個体は台地西方にある3カ所の裸地を好んでいつき、追われても、少時旋回飛翔の後この3カ所の何れかに下りたつことが多かった。採餌中に他の小鳥(例えばツグミ)などが近くに来て何等の反応を示さなかった。

4月14日夕方、一度首を背に入れて就眠したが6時20分に近くを通った人を警戒し、以後着かず、6時37分、突如飛立って、そのまままっすぐ、西北方の空に高く消え去って二度と帰らなかった。

今回の記録は1920年 Hartert の報告したもの以来、42年ぶりの日本内地での記録になる。

謝辞 本稿を草するに当って、種々御教示下さった小林桂助氏、文献の閲覧を許された山階鳥類研究所、有益な御助言をたまわった高野伸二、吉井正の両氏、並に調査に同行され、貴重な写真を快よく貸与下さった金田平、寺島浩一の各氏に対してあつく御礼申あげます。

参 考 文 献

- HARTERT E. 1912~1921.. Vögel Berlin : 1548.
 HARTING J.E. 1870. On rare or little-known Limicolæ Ibis 6.
 池田真次郎 1962. 日本を訪れた珍鳥オオチドリとセイタカシギ 科学朝日 22(10) : 48~51.
 川島 清 1962. 珍鳥オオチドリ観察日記 野鳥 27(4) : 207~210.

- 川島 清 1962. オオチドリ発見の日 日本野鳥の会横浜支部報 40 : 3 (謄写印刷).
 清棲 幸保 1952. 日本鳥類大図鑑 II. 講談社 : 773~774.
 小林 桂助 1956. 原色日本鳥類図鑑 保育社 : 119.
 黒田 長礼 1918. 鷓千鳥類図説 裳華房書店 : 96~97.
 Orn.Soc.Jap. 1958. A Hand-list of the Japanese Birds 4th & Rev. Ed. : 215~216.
 柴田 敏隆 1962. 珍鳥オオチドリを追う 自然 17(9) : 68~70.
 " " 1962. 珍鳥オオチドリを記録 日本野鳥の会東京支部報 86 : 14 (謄写印刷).
 TRISTRAM H.B. 1867. On the Ornithology of Palestine Part V Ibis 3 : 73~97.
 内田清之助 1926. 日本鳥類図説続編 (増訂4版) 警醒社 : 210~211.

R é s u m é

An Eastern Dotterel, *Eupoda asiatica verdus*, was sighted on the plateau of Miyada (alt. 20~30 meters) in Miura City, on the southern part of Miura Peninsula, Kanagawa Prefecture. It was observed from April 8 to April 14, 1962.

Up to this time, the bird was recorded only twice in Japan: Hartert reported in "Vögel" in 1920 that the bird occurred in Japan; and a specimen collected by Awston in Yokohama, date unknown, is in the American Museum of Natural History. There are no specimens from Japan in any Japanese laboratory or museum. Accordingly, this is the first appearance of the bird since Hartert's record of 1920. According to a letter of Mr. Keisuke Kobayashi, Mr. Motoo Matsune of the Nippon Yacho no Kai reported seeing, in autumn, 1961, in Osaka Bay, a bird whose plumage resembled the winter plumage of this species, but the bird could not be positively identified. The Eastern Dotterel is known to breed in Mongolia, Tibet, and the northeastern part of China. In winter the bird migrates to the Philippines, Malaya, Indonesia and Australia. On the Chinese mainland it is found in Szechwan, Hopei, Changsu and Kwangtung (Canton). In the vicinity of Japan the bird is rarely seen except as a straggler or during travel enroute to Korea or the Quelpart or Sakishima Islands.

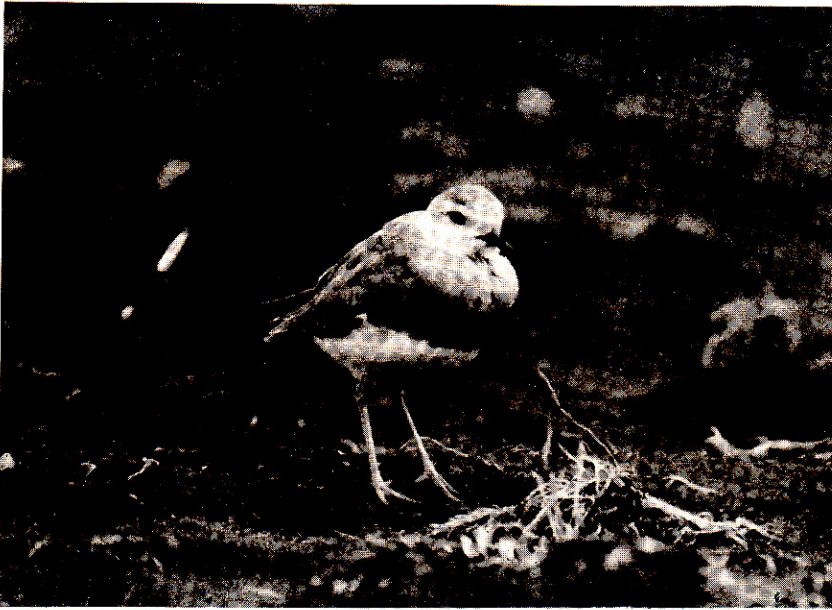
The individual observed at Miyada had almost complete summer plumage, and was on a patch of bare, sterile ground about 3 ha. wide. It did not at any time enter the fields of ripe wheat and onions. A newly sprouted potato field was reluctantly used as a hiding place only when pursued.

The bird was sprightly in its movements like a plover, walking from ridge to ridge on the ground picking up small reddish insects. Observers were too far away to identify the type of insect. At first the bird showed no fear and allowed people to approach as close as 10 meters. Later it became so shy that it would fly away even if approached at a distance of 30 meters. When on the alert it would stand stock still, stretching its legs and neck to their full extent and gazing cautiously all around. At these times tremors like hiccups would shake its body, as many as eight times in a period of 20 seconds. It would rest sitting on the ground or standing on one leg. While sleeping the head was concealed among the feathers of the back.

The bird's flying action was strong and speedy. When it flew up after being pursued, it would flutter in an irregular zig-zag pattern. With its long narrow wings, it looked at first glance like a swift flight.

Its voice sounded like "pee-cheechee, pee-cheechee" or "pee-geegee, pee-geegee" when standing still, a strong "pee, pee" or "peeroo" when on the alert, and a continuous "pee-pee-pee-pee" while flying. Until April 13, even if pursued, the bird would fly about a while and always come down to one of three favorite spots on the bare ground. (see ●, Text-fig. 1) On April 14 at 6:14 PM it went to sleep with its head buried in its feathers, but was startled and alerted by a person passing along a nearby path. At 6:37 PM the bird flew up toward the northwest and disappeared. It never returned to the ground.

During the period in which this rare bird stayed at Miyada, many bird-watchers came to observe it. Its actions were filmed on 16 mm movie film and broadcast over NHK TV. 8 mm movies and monochrome and color photographs were also taken. These are being kept at the Yokosuka City Museum.



Figs. 1~5, 7, 8.
Photo. by K. Terajima
Figs. 6, 9.
Photo. by H. Kaneda

Fig. 1 オオチドリ Eastern Dotterel *Eupoda asiatica veredus* (GOULD)

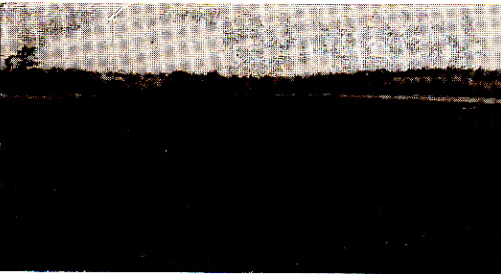


Fig. 2 オオチドリ渡来地の環境
Country over which the Eastern Dotterel flew.
オオチドリの各種姿態 Poses of the Eastern Dotterel *Eupoda asiatica veredus* (GOULD)

Fig. 3 同左.
Same as Left



Fig. 4. 歩行 Walking

Fig. 5. 毛づくろい Grooming

Fig. 6. 飛立ち Take off



Fig. 7 後姿 Dorsal view

Fig. 8. 警戒 On the alert

Fig. 9. 飛翔 In flight